



1984・秋・第21号

Αγορα アゴラ

鶴見大学図書館報



目 次

開架式図書館	菅原 信一	1-3
貴重資料紹介 そのⅦ 源氏物語関係資料 2	高田 信敬	4-9
新刊アラカルト		10-11
図書館だより		12

開 架 式 図 書 館

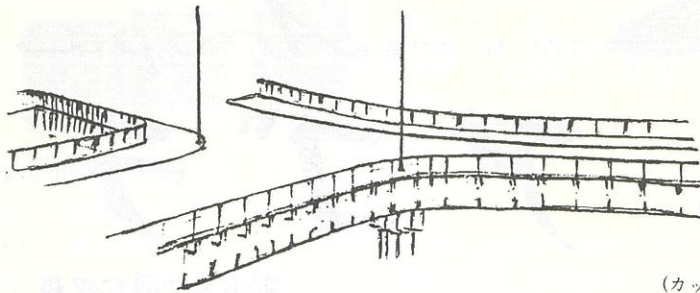
歯学部教授 菅 原 信 一

「図書館に少しでも関係することならどんなことでもよいですから」と言われても、自慢することなど何もないが、それでも何かと言われると、初めて公共の図書館を知った、大学受験のころのことがある。それは敗戦の混乱も治って、復興から高度成長に入ろうとしていた1950年代で、だいぶ住宅事情も良くなってきたと言われてはいたが、私のところはまだ依然として六畳一間の間借り住いで、図書館にでも行かなければ勉強するところもなかったころであった。当時はまだ図書館の数も少なく、受験勉強のためにだけ利用する高校生の入館を断わる図書館もあったが、浪人にはそれほどでもなかった。その数年後には、浪人の数も増えて、朝早くから並

んで順番を待たないと入れなくなって、一般の利用者が迷惑しているということが新聞に載ったことがあった。

当時、私が行った図書館に、千代田区立駿河台図書館、中央区立京橋図書館、都立日比谷図書館、国立上野図書館、それに国立国会図書館（赤坂離宮跡）がある。現在、その名称も場所も変ってしまった図書館もあるが、その中で一番利用したのが京橋図書館であった。他の図書館は一回か、多くて二回程度で、周囲の人々の熱気に圧倒されてしまい、落着いて勉強できずにすぐ出てきてしまったこともあった。

当時の図書館はほとんどが出納式であったが、京橋図書館は戦前からの数少ない開架式



(カット・著者)

図書館の一つであったとのことであった。とは言っても、今のように開放的でなく、なんとなく重圧感があった。入館する時、玄関の受付でチェックされ、そこで閲覧のための用紙をもらった。中に入るとすぐ右に児童閲覧室の出入口があり、奥の左に階段があった。階段を昇ると図書カードを入れた箱が並んでいる薄暗い部屋があった。その右に閲覧室があり、ガラス窓のある壁で仕切られていて、木製机と椅子が並んでいるのがみえた。前方に小さい部屋があって、そこでは新聞が自由に読めるようになっていた。左が書庫になっていて、その出入口に出納係のいる受付窓口があった。その前を通過して書庫に自由に入れた。書架は出入口を中心に放射状に並んでいて、窓際の方は中二階になっていた。中二階へは鉄の階段が付いていて、いくら静かに昇り降りしても足音が書庫内に響いたのを思い出す。自分の読みたい本を選んでから、その本の整理番号と書名、それに住所と名前を用紙に書き込んで出納係に提出し、チェックを受けてから本を閲覧室に持ってきて読んだ。帰る時は本を出納係に返し、チェックを受けてから閲覧用紙を返してもらって、それを玄関の受付に渡して退出する方式であった。

当時の京橋図書館は中央区役所と棟続きで、築地川と楓川連絡運河が合流する三叉になったところの角にあり、三叉の上に三吉橋（みよしばし）という名のY字型の橋が架っていた。また、図書館の隣りには道を隔てて

築地警察署があり、閲覧室の窓越しに鉄の格子窓や柔道場がみえた。川の水は潮の干満で動く程度で、夏などは悪臭のするときもあった。

書くからには図書館や橋の名称を正確に書かなくてはと思い立って、先日、30度を越す夏の暑い日盛りに訪ねてみた。有楽町駅から読売新聞社（現在：プランタンデパート銀座）の横を通過して、銀座中央通り、昭和通りを横切って図書館まで歩いてみたが、当時の面影はほとんどなくなっていた。行ってみるとあるはずの築地川の上に公園があり、Y字型のはずの橋が真っすぐで、一瞬方角を間違えたかと戸惑ったが、よく周囲を見渡すと、橋を渡った角に高層ビルになった築地警察署があり、左手の方に三吉橋がみえた。道を一本間違えて亀井橋に出てしまったのだった。三吉橋は昔と同じY字型をしていたが、橋脚や欄干等は新しく作り替えられたようであり、橋の上から下をのぞくと自動車が走っていた。三吉橋附近の築地川は昭和37年に埋立てられて、川底が首都高速道路一号線となり、その下に地下鉄有楽町線が走っているとのことである。川の両岸には高層ビルが建ち並んで、昔みられた木造の家はほとんどなく、区役所も昭和44年に建替えられて高層ビルになっていた。

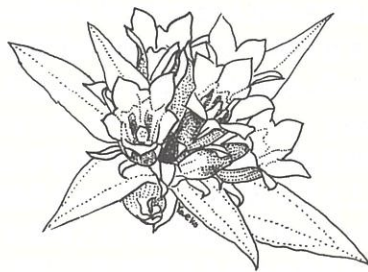
図書館は区役所の地下一階と二階にあり、玄関は区役所と反対のところにあった。玄関の前は広場になっていて、茶色のタイルが敷

き詰められていた。訪ねた時、日陰になっていたせいか玄関が薄暗い穴の奥にあるように感じたが、中に入ると広々としていて、冷房がきいていて涼しかった。玄関を入るとすぐに受付があり、係りの職員がいたがなんのチェックもなく、入館者の数を調べる数取機が机の上に置いてあって、入館者自身がおすようになっていた。右に広いロビーがあって、その一隅には新聞雑誌コーナーが設けられて、ソファで気楽に読書を楽しめるように造られてあった。左には児童閲覧室があった。奥に透明ガラスで仕切られた大きな部屋があって、中央に職員用机が並んでいて、数人が仕事をしていた。部屋の約右半分に書架が平行に数列並んでいて、本を自由に手に取って見られるようになっていた。そばの貸出係の机があって、担当の職員が色々と相談を受けていた。左半分に白いデコラ張りの閲覧者用机が並んでいて、本を自由に持ち出してきて読んでいた。地下二階には郷土資料室があって、担当の職員が利用者の相談相手となって、本やスライドを探し出して見せていた。私もそこで色々のことを聞くことができた。

今年の7月22日の朝日新聞の「現代社会」高校生とともにの欄に、「宣言」基本に独自性を保持、表現の自由を支える図書館、という表題で、図書館運営の基本として、1954年の全国図書館大会で「図書館の自由に関する宣言」が採択され、その要旨は（１）資料収集の自由、（２）資料提供の自由、（３）利用者の秘密を守る、（４）すべての検閲に反対する、という記事が載っていた。私は1955年ごろ港区芝にある日赤本社図書館を時たま利用していた。行き初めのころは確か出納式であったような気がしたが、いつのまにか開架式になっていて、やはりこの方式はよいものだと本気で思ったこともあった。そこは医療に関係のある人以外は入館できなかったのも、利用する人がいつも少なかった。本は主とし

て医学に関するものであったが、赤十字に関する史料が多くあったような気がする。それでも歯科以外の医学のテキストブックを調べて勉強するのには都合がよかったので利用していた。他の図書館と違っていたのは入退館時に昇水で手を洗わないと係りの人に注意されることであった。

今はコピーが発達して必要な文献を容易に得られるようになったが、現物の写真をみたいこともあって、もっと多くの本や雑誌が本学図書館にあり、しかも欠落のページのない状態でみられることを望んでいる。ところが先日、本学図書館のある係の人から聞いた話によると、最近、雑誌の紛失がとくに激しく、多くの人がみたがっているものが主に狙われるが、中にはごく一部の専門の先生方しか見ないであろうと思われる外国雑誌も含まれているとのことである。それでも補充のきくものならばまだなんとかできるけれど、補充のきかない国外のものになると製本も整理もできないとのことである。開架式は今や一般化され当たり前になっているが、利用者がすべて善人であると信用するしかなく、破損や紛失をいちいち気にしていたのではやっていけない。だからと言って、管理のしやすい出納式にしたら、利用者に反対されるだろうし、何かよい方法がないでしょうかとのことであった。いずれにしても、図書館を利用する自由と身勝手を履き違えている人がいることは驚きであり、本当に困ったことである。



源氏物語関係資料 2

文学部講師 高田 信敬

源氏物語が平安時代のみならずわが国の文学の歴史全般を通じても稀有の達成をとげていること、今更言挙げに及ばぬところであって、これを生み出した時代において既に評価の高かったがゆえに、その研究も千年に及ばんとする重みと厚みを持っている。

ところで、作品について何かを考察する場合は勿論のこと、単に楽しみとしてこれを読む時でさえも、本文それ自体——どんな言葉がどんな風に綴られているか——をぬきにすることは一步の前進すら不可能であろう。源氏物語は元来どんな形をしていたか、古い時代の本文はどんなものであったか等を研究する分野での諸先学の苦心の結果は、一応『源氏物語大成』及び『源氏物語事典』によってその基礎的到達点^{*}が示されており、両書の斯学への貢献は類を絶していると言ってよい。しかしその一方で本文研究の如き基礎的分野がすべて開拓され尽したかのような印象をもたらし、研究者人口の大半がこの分野から撤退する結果を生んだ。源氏物語本文に関する研究は細部にわたって安定した堅固な成果を挙げる前に、やや停滞の趣きを呈した。たとえばその片鱗すらまったく不明の紫式部自筆原本は言うに及ばず、菅原孝標女や藤原俊成のような熱心な読者の絶えなかった、したがって幾度も幾度も写されたはずの平安時代の伝本は、わずかに源氏物語絵巻詞書の断簡をあげうのみで、典籍としては1帖すら発見されていない。

平安時代書写源氏物語の搜索は夢のまた夢であるとして、現在我々が目にしうる主要伝本について十全な解明がなされているか。これも否である。たとえば『源氏物語大成』底本に採用され諸伝本中最善の定評ある大島本

(飛鳥井雅康筆本)は、その徹底的な書誌の報告すらない。本文研究は最も基礎的領域とされながら、実はすこしつっこんでものを考えてみると疑問百出、まだまだ未開拓の荒野なのである。

数多くの源氏物語伝本は、藤原定家の手を経た青表紙本と河内守源光行・親行父子の校定になる河内本、その両者に属さぬ別本とに大きく三分類されている。今後各伝本の個別的な精密調査を通じて、分類を一層きめ細かにする——あるいは分類それ自体の再検討に至るかも知れない——必要があらう。

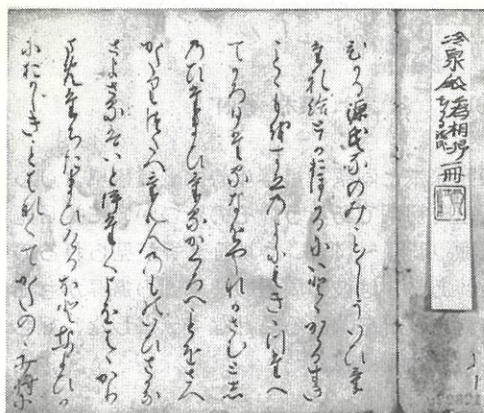
前に記したように平安時代書写の源氏物語は一帖すら存しない、したがって現存最古の伝本は鎌倉時代のものと言うことになる。しかしそれすら54帖揃って一時期に写されたものは皆無に近く、伝来途中で欠本となり補写され、あるいは数種のとりあわせ本となったりしたものばかりである。ゆえに、源氏物語古写本は一括一揃に論ずることは不可と云うべく、1帖1帖に独立した価値を認め個別に調査研究すべきものなのである。その意味で後に紹介する伝為相筆は、残巻を合して1冊となしたものだと言え、鎌倉時代書写の貴重な伝本と称しうる。

この伝為相本をはじめ若干の源氏物語関係資料については、すでに池田利夫教授の紹介^{*}あって屋上屋を架するようではあるが、その他新しく収蔵の典籍も存するので、ここに改めて源氏物語伝本から書写年代の古い順に解題を施す次第である。記述の繁簡不整は御覧じゆるさるべく、事実誤認考察不徹底は御示教下さるべし。

※『アゴラ』創刊準備号の「貴重資料紹介」。

1 源氏物語 帚木・須磨残巻合綴

列帖装1冊（17.5cm×17.1cm）。墨流し地に金銀泥霞引採、切箔野毛等の装飾ある斐紙表紙。見返しは銀切箔をかなり密に蒔く。巻頭遊紙2丁のうち「二 はゝ木ゝ」と墨書のある最初の1丁は改装時に挿入のもので、他が斐紙であるのと異り、楮を主体とした料紙を用いている。墨付45丁（うち帚木10丁）、1面9行（帚木）と10行（須磨）18字程度に写す。



1、帚木・須磨残巻合綴

和歌は須磨の部分にのみあり、改行2字下げ2行乃至3行書きで、末は地の文に直接続く。巻頭遊紙第2丁（元来第1丁であったもの）裏左肩に極札を貼り、古筆勘兵衛（1629～1674）の手で下の如く記す。

「冷泉殿 為相卿ひかる源氏【守村】」（裏に「了任」）

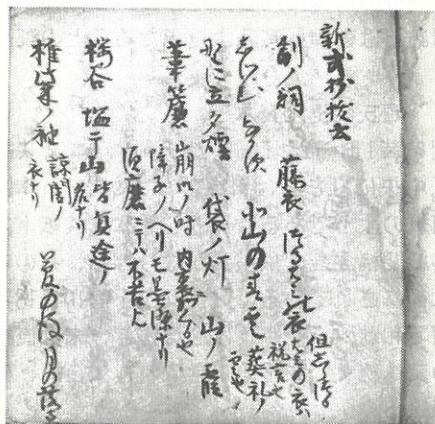
全体は4括りより成り、第1が帚木、第2の括り以下が須磨となっている。1面行数、墨色、朱台点の有無（須磨にのみ存）、本文系統（後述）よりして元来別々の源氏物語中にあった帚木と須磨とが、何らかの事情で零本となり残巻となったのを、ある時期に現在見るが如き形態に改装台綴されたものと考えられる。帚木・須磨两部分の最初と最後の丁は他の丁に比して汚れが目立ち、相当長期間装訂もされず括りのままで伝存した様子である。

る。列帖装典籍は時に冊単位でなく括り単位で調べないといけない。

さて極札は冷泉為相筆と断じているが、無論古筆家の常として当っているはずもなく、また両者酷似した書風ながら、帚木・須磨は別人の手になるもの——上記諸項目間の差異もまた、これを傍証する——と認められ、しかも帚木の方がやや古いようであって、書写時期も異なると思われる。臆断を示せば、帚木は鎌倉時代後半、須磨は鎌倉時代末の写となるうか。

本文系統は、帚木（大成35頁～39頁11行目までに相当）が青表紙本系池田本にやや近く、冒頭を欠く須磨（大成400頁6行目以下のみ存）が同じく青表紙本系大島本によく一致する。

※一面行数だけでは、無論同筆か否か、つかぬかの判断はなしえない。同一人が同一書型の典籍に、しかも異なる行数で写している例も存するからである。たとえば日本大学図書館蔵三条西証本源氏物語紅梅の巻。



2、新式抄抜書 巻頭

2 源氏物語 須磨付新式抄抜書

列帖装1冊（15.9cm×15.1cm）。薄萌葱色地に草花を織り出した緞子表紙、その左肩に斐紙金泥下絵（菊水、霞引）題簽を貼り冷

泉流の手で「須廣 為定卿筆」と書く。見返しは緑色地紙に金銀の裂箔散らし。本文料紙や薄手の斐楮混漉、本文墨付56丁1面10行16字～20字程度、巻末遊紙を利用して新式抄拔書を3丁にわたって記す。和歌改行2字下げ2行書きで末は地の文に直接続く。数手の書き入れ、朱台点（2様あり。前半は朱のみ、後半は墨台点の上を朱でなぞる）存す。

南北朝前半の写と思われ、題簽に言うところの二条為定（1293～1360か）とは時代的には合致する。巻末の「新式抄拔書」はこれより若干下り、室町初期のものであろう。二条良基（1320～1388）撰の連歌新式（応安新式）の抄出加注で、貴重な伝本と思われるが門外漢の発言はさしひかえ、専門家の教示をまちたい。なお前記書き入れのうち、すくなくとも一手はこの「新式抄拔書」と同筆らしく、須磨の古写本を読みすすめ自ら注を加えなどして、その余白を利用し連歌の書を写した風雅の士がいたことになる。

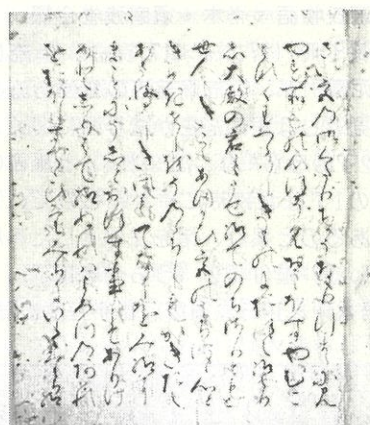
なお本文は青表紙系諸本中池田本・肖柏本・三条西家本等中世の流布本であったと思われる一群の伝本に同じ。裏見返しに「月明荘」の印あるは書肆弘文荘より出たことの証。

3 源氏物語 賢木

列帖装1冊（27.1cm×21.0cm）。本文共紙表紙中央に打ちつけ書きで「さか木」、本文と別筆のようである。見返しも本文共紙。本文料紙斐楮混漉、虫損がかなり存し、その若干は補修されている。墨付64丁1面10行18字程度で和歌改行2字下げ2行書き、末は直接地の文へ続く。朱墨の書き入れ、朱台点、朱濁点等あり。

書き入れのうち墨は引歌（9ヶ所）を行間に示したものであり、朱は「秋好中宮 伊勢群行事」「紫式部我身上云り」「悪大臣」のような簡単な注である。両者同筆らしく、本文よりは下った室町末～江戸初期のものか。

本文を検するにこれも池田本・肖柏本・三



3、賢木 巻頭

条西家本と同系、書写年時は紙質書風よりして室町初期であろう。その筆づかいに招月庵正徹（1381～1459）と似通う所が見られるので、あるいは彼の周辺の連歌師の書写かも知れぬ。装訂を改めることなく伝来した、好ましい典籍である。

4 源氏物語 五帖分欠

列帖装49冊（17.1cm×17.6cm）。藍色紙表紙中央に素紙題簽を貼り巻名を記す。見返し本文共紙。本文料紙は室町時代によく見られる黄がかった鳥の子。1面10行15字程度で数筆による寄り合い書き、本文もまた青表紙本・別本を交えた特殊なもので1帖1帖の精査を必要とする。和歌改行2字下げ2行書き、末は直接地の文に続く、朱読点、台点（ただし不揃。たとえば桐壺には台点稀、夕顔にはかなり存し「源氏釈」注項目とほぼ対応する）あり。巻頭に「図書寮」「越国文庫」（福井松平家）、「出養」（福井藩校）の蔵書印を押す。

各冊末に校合奥書あって天正11年（1583）正月より同12年6月に至る。一例を示せば下の如し。

「天正十一曆親月仲十日校合畢 再校了」（夕顔）

すなわち2年半をかけて校合、また再校を

行ったことになる。本文そのものの書写にどの程度の時間を要したか、また校合の天正11年よりどのくらいさかのぼった時点での写しかは不明であるが、書風よりすれば永禄・元亀（1558～）以降と言うところであらうか。

現在、帛木・空蟬・明石・初音・手習の5帖を欠いてはいるけれども、表紙に貼られたラベルには「文学／三二〇／五四冊」とあって旧蔵者は54帖一揃で持っていた。5帖の欠失はさほど遠い昔ではあるまい。



4、越国文庫旧蔵（49冊本）桐壺 巻頭 夢浮橋 奥書

本文は前記の如く1帖1帖の精密な調査の後に初めて明らかにされるべきものだが、今桐壺だけをとってみれば青表紙本系肖柏本に極めて近い。

ともかく明瞭な校合奥書を持っていて、本文的に価値が高く、かつ旧蔵者が北国の名流であること等、注目すべき典籍の一つである。

※「図書寮」「越国文庫」に大小二様の印文

あり、この源氏物語は大様を押している。なお「出鬘」は蔵書印でなく廃棄印であろうとは池田教授の説。

5 源氏物語 54帖合33冊

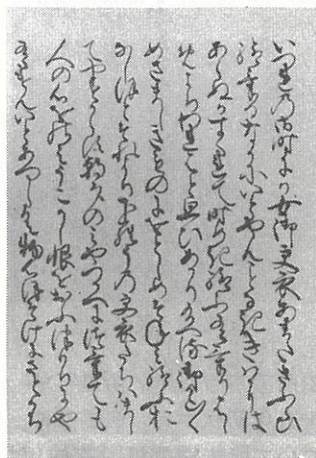
包背装33冊（25.5cm×18.9cm）。蓮華唐草を摺出した藍表紙中央に、布目紙金銀泥下絵（海賦模様）の題簽を貼り「きりつほ……」

「てならひ／夢のうきはし」等と巻名を記す。見返し本文共紙。本文料紙は薄手楮紙で1面9行19字程度、和歌改行2字下げ2行書き、末は直接地の文へ続く。数筆による寄り合い書きで、朱読点、合点、巻によっては不審紙を押す。

物語の写本で包背装と言うのがまずおもしろい。仏典・漢籍写本や五山版には比較的に見られるものだが、文学作品では珍しい装訂に属すであらう。原装のままであるのもありがたい。

次いで伝来。古い塗箱に入り、その蓋表には「折敷に三文字」の紋を二つ高蒔絵にしてある。書肆弘文荘によって淀藩稲葉家旧蔵と記されるものの「折敷に三文字」の紋は臼杵、淀、館山と三つの稲葉家に共通であり、蔵書印や伝来を示す識語がない以上、厳密にはいずれとも決めがたい。が箱の出来具合や典籍の風格は、しかるべき名家の蔵書たりしことを物語っている。夢浮橋末尾に「月明荘」の印あり。

さて前記塗箱の外にもう一つ杉箱があり、



5、桐壺 巻頭

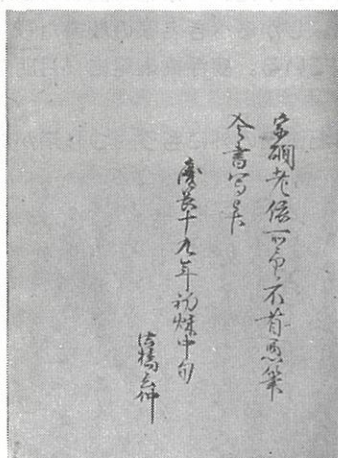
その蓋表に「源氏物語 天正慶長頃写 五十四帖」と墨書してあるのは弘文荘の所為、書写年時を「文禄慶長」でなく「天正慶長」とするのも妙なものだが、おそらくそれより若干下っ

て慶長元和(1598~1623)の写しとすべきであろう。本文系統は各帖の検討が済んでいないので何とも言えないが、桐壺だけを例にとれば青表紙本系肖柏本・三条西家本に近い。

※淀藩稲葉家には「淀府内帑図書之章」の蔵書印がある。

6 源氏物語 松風

列帖装1冊、藍で網、州浜等を刷った紙表紙(24.2cm×17.4cm)は改装も表紙中央に金銀泥模様(薄・月)題籤「まつかせ」を貼る。見返しは本文共紙、料紙は斐紙で墨付24丁1面10行17~20字程度、ただし冒頭1行は字粒を大きく書写する。本文と同筆で異本校合、朱の読点・合点あり。和歌改行2字下げ2行書き、末は直接地の文へ続く。第23丁裏左下に「一校了」と記し、次の丁に下の如き奥書あり。



6、松風 奥書

宗硯老依所望不省惡筆／令書写早

慶長十九年初秋中旬 法橋玄仲

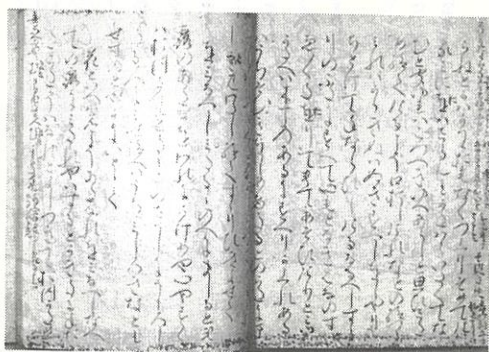
宗硯については未勘だが、「玄仲」は里村紹巴の二男で父と同じく臨江斎と号し、幕府連歌師として活躍した里村玄仲(1578~1638)、慶長19年(1614)には27才の若さである。他の自筆資料と比較してみると、玄仲の手になると認めてよいと思われる。

本文系統は青表紙本系大島本にかなり近く、校合された異本は三条西家本と同様の伝本である。保存のよい、瀟洒な一本。

※寛永8年成立の「賀州行記」(柿衛文庫の一本のみ)撰者とは、国書総目録の教えるところ、乞御教示。

7 源氏物語 東屋・浮舟・蜻蛉

袋綴3冊、薄香色地に雲母にて藤を描いた絵表紙(20.0cm×16.2cm)は改装らしく、その際天地左右若干を載つているため、書き入れに判読不可能なところが生じている。表



7、東屋・浮舟・蜻蛉 蜻蛉

紙中央に素紙題籤(東屋の分は落剥)を貼り「うき舟」「かけろふ」と記す。見返しは薄様、本文料紙斐紙だが、東屋のみは他の2冊に比べてかなり薄手のものを用いている。墨付各々68、84、68丁、1面21字前後、和歌改行1字下げ2行書き、末は直接地の文へ続く。相当量の書き入れあり、本文と同筆のようである。この書き入れの性格については後掲扉識語の「抄」と共に今後詳しく調査してみたいが、孟津抄の如きものを引くか。朱合点少々。

東屋扉表に下の如くあり。

正保三曆^(マフ)申戌歳十二月五日

(東屋冒頭を3行分抄写、以下各冊とも同

様)

東屋

此巻抄ニ見合早（墨色他に異なる）

正保3年（1646）は丙戌であり、この前後で甲（底本の「申」は誤写であろう）戌にあたるのは寛永11年（1634）と元禄7年（1694）である。書風紙質よりして正保3年の書写もしくは校合と考えてよいが、干支の不整合をどうしたものか。なお浮舟、蜻蛉には「卯ノ五月朔日」「卯ノ正月十四」の日付があり、これが前の「甲戌」といかなる関わりを持つかも不明である。江戸初期写は動かないところとしても。

本文系統は青表紙本系三条西家本に近いと考えられるが、河内本との接触を思わせる箇所や誤写によるらしい独自異文も見られる。

8 源氏物語 桐壺

列帖装1冊、薄金茶地に沢瀉、瞿麦を織り出した銀欄表紙、その中央に鎗泥で青海波・蜻蛉を刷った題簽「きりつほ」を貼る。見返しは斐紙に金裂箔を細かく蒔く。本文料紙斐楮混漉、墨付35丁1面10行16字前後。書き入れ、朱点等なし。和歌改行2字下げ2行書き、末は直接地の文へ続く。

扉表に極札を貼る。

「飛鳥井雅章卿 きりつほ【守村】」

古筆別家のものだが裏印がないので何代目か不明。古い桐印籠蓋箱が付いていて、その蓋表に「きりつほ 飛鳥井殿御筆」、蓋裏に紙片を押し下の如く墨書、また「竹処」の朱印あり。

「飛鳥井雅章書

きりつほ巻本

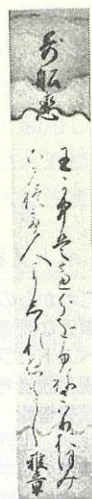
竹処珍襲」

旧蔵者「竹処」の何人たるかを知らず。

この典籍の筆者とされる飛鳥井雅章（1611～1679）は、江戸時代前期の代表的文化人で、能書家として、また歌人として聞えていた。たしかに雅章の風ではあるが、他の自筆資料



8、桐壺 巻頭



参考（右の写真）飛鳥井雅章筆短冊（南園文庫蔵）

を見るとにわかに同人の筆とは断じがたいものがある。と言ってもその上品な筆づかいは、雅章と同時代の堂上の手になると推するに十分と言え、古雅な表紙、しやれた題簽と相俟つて、この桐壺の巻を一しお愛すべきものとしている。

本文系統は青表紙本系肖柏本・三条西家本に大略同じ。

以上8点の主として書誌的解説を試みた。

本学には源氏物語関係書としてこれら以外にも本文それ自体の、また物語享受の歴史を跡づけるものには注釈、梗概書、双六等の写本版本を蔵し、そして年ごとに新しい典籍を加えつつある。前田尊経閣・陽明文庫等、由緒ある名流貴紳の蔵書、財界人の巨富よく秘籍を積んだ静嘉堂文庫・大東急記念文庫など、また集書の熱意と高額の予算によって海内無双のコレクションを形成した天理のような大学付属図書館には勿論遠く及ばずとも、本学の歴史と規模とを考えれば、やはり一偉観と自慢しうるものであろう。今後機会を得て順次報告の予定である。

新刊アラカルト

書名 (叢書名)	著者	出版社	出版年	請求記号
《人文科学関係図書》				
これからの図書館	菅原峻	晶文社	1984	016.21-S
贅沢な読書 何を選ぶか (講談社現代新書)	向井敏	講談社	1983	019.1-M
ベストセラーの構造	中島梓	講談社	1983	019.1-N
現代読者考 (エディター叢書)	尾崎秀樹ほか	日本エディタースクール	1982	019.1-O
読書燈籠	杉原四郎	未来社	1982	019.1-S
物語 世界の書籍出版社	出川沙美雄	日本エディタースクール	1982	023-D
偶然の科学 (東京大学教養講座)	竹内啓	東京大学出版会	1982	041-G
博物館と情報 館長対談 (中公新書)	梅棹忠夫	中央公論社	1983	069.04-H
かながわの近代建築 (かもめ文庫)	河合正一	神奈川合同出版	1983	K-K
ジョークとトリック (講談社現代新書)	織田正吉	講談社	1983	141.5-O
神と仏 日本人の宗教観 (講談社現代新書)	山折哲雄	講談社	1983	160.21-Y
仏教を読む 全10巻		集英社	1983-	183.08-B
曼荼羅のみかた パターン認識 (岩波グラフィックス) 石田尚豊		岩波書店	1984	186.85-I
カラー図説 聖書の偉大な人びと その生涯と日常生活		学習研究社	1983	193-S
天城シンポジウム 日本と中国 民族の特質を探る 江上波夫ほか		小学館	1982	210.04-N
書き替えられた国書 徳川・朝鮮外交の舞台裏 (中公新書) 田代和生		中央公論社	1983	210.52-T
中国人の機智 『世説新語』を中心として (中公新書) 井波津子		中央公論社	1983	220.04-I
クレオパトラの謎 (講談社現代新書)	吉村作治	講談社	1983	242-Y
ワーグナーの妻コジマ リストの娘の愛と策謀	G.R.マレック	中央公論社	1983	289.3-W
海外旅行べんり事典 ちょっとヨーロッパ	長崎快宏	三修社	1983	290.8-C
岡倉天心 その内なる敵	松本清張	新潮社	1984	702.16-O
漫画昭和史 漫画集団の50年	漫画集団	河出書房新社	1982	726.1-M
ビューイックの木版画 (研究社選書)	平田家就	研究社出版	1983	733-H
中国の美 風 中国風箏	中国人民体育出版社	ベースボール・マガジン社	1983	759-C
音のいい残したもの 同時代の窓から	池辺晋一郎	音楽之友社	1982	760.4-I
モーツァルト 音楽と旅の生涯	F.マルソー他	福武書店	1982	762.346-M
私のシネライフ	高野悦子	主婦と生活社	1983	778.04-T
パズルで遊ぼう (講談社現代新書)	岡田光雄	講談社	1983	798-O
ジョンソンの『英語辞典』 その歴史的意義	永嶋大典	大修館書店	1983	833-N
日本翻訳語史の研究	杉本つとむ	八坂書房	1983	849.307-S
小説とは何か 英米作家を中心に	M.ボウルトン	英宝社	1981	901.3-B
テキストの記号論	富山太佳夫	南雲堂	1982	901.4-T
城と弦量とゴシックを読む	小池滋ほか	国書刊行会	1982	902.02-S
文学における父と子	佐藤泰正	笠間書院	1983	904-B
原爆とことば 原民喜から林京子まで	黒古一夫	三一書房	1983	910.26-K
リトルマガジンを読む	紅野敏郎	名著刊行会	1982	910.26-L
レトリックの装置 戦後文学論	宮本徹也	教育出版センター	1984	910.26-M
謎の歌聖 柿本人麻呂 (日本の作家)	橋本達雄	新典社	1984	911.122-K
『セルバン』と詩人たち	高橋留治	北書房	1983	911.52-T
野上彌生子の世界	瀬沼茂樹	岩波書店	1984	913.6-N87-S
十二の肖像画による十二の物語	辻邦生	文藝春秋	1981	913.6-T120

書 名 (叢 書 名)	著 者	出 版 社	出版年	請求記号
本の顔 本の声 秋山駿書評1973-1981	秋山駿	福武書店	1982	914.6-A7
ブダベストの古本屋	徳永康元	恒文社	1982	914.6-T
中国の名詩 全10巻		平凡社	1982-83	921.08-C
イギリス小説の女性たち	鷲見八重子・岡村直美 勁草書房		1983	930.62-I
アーサー王 その歴史と伝説	R.バーバー 東京書籍		1983	931.8-B
『ガリバー旅行記』論争	和田敏英 開文社出版		1983	935.4-W
ロレンスを愛した女たち	中村佐喜子 中央公論社		1983	939.8-N
グレアム・グリーン語る		早川書房	1983	939.0-G12
黄金のりんごの王子	M. マークス 新書館		1983	939.0-M37
鯨とテキスト メルヴィルの世界	大橋健三郎 国書刊行会		1983	932.15-K
ゴーゴリ伝	A.トロワイヤ 中央公論社		1983	980.28-G

《社会科学関係図書》

ビバ! メキシコ (講談社現代新書)	田辺厚子	講談社	1984	302.56-T
民衆史の発見 (朝日選書)	色川大吉	朝日新聞社	1984	309.021-I
派閥 (講談社現代新書)	内田健三	講談社	1983	315.1-U
日仏の交流 友好三百八十年	高橋邦太郎	三修社	1982	319.1035-T
新・核戦略批判 (岩波新書)	豊田利幸	岩波書店	1983	319.8-T
わなと裁判 アメリカと日本 (中央新書)	道田信一郎	中央公論社	1983	327.953-M
女たちのロンドン	加藤春恵子	勁草書房	1984	367.233-K
心が痛い 十代の受難 (講談社現代新書)	畑山博	講談社	1983	367.7-H
あたらしい家庭教育 (子どもと教育を考える)	藤永保	岩波書店	1983	370.8-K
挑発する子どもたち	山口昌男ほか	駈々堂出版	1984	371.45-C
感情教育論 子どもの言語生態研究	上原輝男	学陽書房	1983	375.82-U
土ふまずの形成と幼児の発達課題	原田碩三	黎明書房	1983	376.1-H
子どもの事故の法律相談	森島昭夫・富島照男 中央法規出版		1982	376.14-K

《自然科学関係図書》

地震学事始 開拓者・関谷清景の生涯 (朝日選書)	橋本万平	朝日新聞社	1983	402.1-S
数学迷答集 誤答から学ぶ (ブルーバックス)	田村三郎・船越俊介	講談社	1983	410.4-T
シミュレーションの発想 新しい問題解決法	中西俊男	講談社	1983	417-N
超光速粒子タキオン 未来を見る粒子を求めて	本間三郎	講談社	1982	429.6-H
東京地震地図 (新潮選書)	宇佐美龍夫	新潮社	1983	453.2136-U
日本の火山地形 (UP Earth Science)	守屋以智雄	東京大学出版会	1983	453.8-M
進化の新しいタイムテーブル (岩波現代選書)	S. M. スタンレー	岩波書店	1983	467.5-S
医の心 医の哲学と倫理を考える	北里病院	丸善	1984	490.1-I
死をどう生きたか 私の心に残る人びと (中公新書)	日野原重明	中央公論社	1983	490.14-H
代診医者はスクーターに乗って	城後昭彦	講談社	1981	490.4-J
西洋医療器具文化史	E. ベニヨン	東京書房社	1982	492.802-B
セルフ・コントロールと禅 (NHKブックス)	池見西次郎ほか	日本放送出版協会	1981	493.09-I
写真でみる 老人病の予防と看護	山本孝之	中央法規出版	1983	493.18-Y
歯科国際会議のための英会話	高添一郎	医歯薬出版	1983	D07-T
歯無しにならない話	朝日新聞科学部	朝日新聞社	1984	D4-A
台所、調理場の衛生 家庭から給食施設、食品工場まで	高橋泰二	中央法規出版	1983	498.55-T
空間の原型 すまいにおける聖の比較文化	上田篤ほか	筑摩書房	1983	520.4-K
飛行機雑学事典 最新技術のすべて	河崎俊夫	講談社	1983	538.6-K
ファイン・セラミックス「魔法の陶磁」を科学する	柳田博明	講談社	1982	573-Y
日本人の求めたうま味 (中公新書)	近藤弘	中央公論社	1983	596.11-K
穀物メジャー 食糧戦略の「陰の支配者」 (岩波新書)	石川博友	岩波書店	1981	611.38-I

図書館だより

◎閉館日、開館時間変更のお知らせ

10月12日（金） 12時より開館（御忌会）

10月31日（水） 月末閉館日

11月1日（木）
} 閉館（大学祭）

11月5日（月）

11月21日（水） 閉館（開学記念日）

11月22日（木） 閉館（全学研修日）

11月30日（金） 月末閉館日

12月7日（金） 12時より開館（成道会）

12月24日（月）
} 開館時間は
9：00～16：30

12月28日（金）

12月29日（土）
} 閉館

1月5日（土）

1月7日（月） 9：00～16：30

◎冬休みの貸出について

貸出期間 12月17日（月）～1月11日（金）

貸出冊数 学生1人2冊

- 蔵書の一部を預けました。図書館の所蔵する資料の増加に伴って、その保管スペースに頭を痛めることはよく聞く話です。本学も例外ではありませんでしたが、このたび長年の夢がかない新館建設の運びとなりましたので、その落成までのこととしてやむをえず、蔵書の一部を専門保管業者に預けることにしました。利用上、ご迷惑をおかけすることがあるかも知れませんが、しばらくの間ご辛抱ください。

あたらんだむ

- 本の虫干しは曝書といって、かつては旧暦の6月、天気の良い日に1冊ずつ外気に当てて、紙魚や黴の害から貴重な本を守ったものです。しかし、ふいの雨や外気に晒す事による紙の劣化、顔料の退色等色々問題は多く、現在はエキボンという薬によって、密室の中で処理されます。本学でも夏休みに入ってすぐその作業にかかるのが恒例になりました。

- 森林浴がクローズアップされています。木々の樹脂から発する香気（フィトンチッド）が、自律神経の働きを活発にしたり、瞳孔の反応を鋭敏にしたりして、快適に感じさせるようです。総持寺の木立ちの中でする読書、机に向ったのとはまた別な感動を与えてくれるかも知れません。

- 雑誌の創刊ラッシュは目を眩るものがあります。本学でも今年

コンピュータ ソフトウェア
ライブラリアンズ フォーラム
地名と風土
子どもと美術
列島の文化史
GS・たのしい知識
季刊 銀花：別冊 手紙
The 座

などが受入れされました。上記以外にも受入れされています。どうぞ一読ください。（本館2階・3階雑誌架）

アゴラ——鶴見大学図書館報——

第21号 1984年10月15日発行

鶴見大学図書館発行（館長 手崎政男）〒230横浜市鶴見区鶴見2-1-3 045-581-1001